

光の子



No.121 2006.11.1



「おけいこ」

挿絵・中島英子

「それから秋」

昼の虫鳴くだけ鳴かせ廊跡

ふと声の止みし夜寒の障子かな

白粉花のかたへに鬼のもういいかい

船発ちて二百十日の杭残る

爽やかに敵の校歌を聞いてをり

回廊をめぐる足音十三夜

シーサーの海に眼を剥く終戦日

俳人 黛 まどか

児童養護施設における 暮しと子どもの養育を考える 1

菅原 哲男

児童養護施設における不適切な関わりに関する報道が終らない。埼玉県の間である施設と同じような児童養護施設における犯罪が全国的な拡がりを見せているようだ。

そのたびに当該の施設の当事者が、そして管理責任を問われて理事長や施設長などが、特に監督官庁から厳しくおとがめを受け、辞任していくことがパターン化している。

そして、埼玉県に特化しているかは不明であるが、児童相談所長経験者などが当該の施設長などに収まるのが通例のようだ。監督官庁が民間法人の人事にこんなコミットしていいのだろうか、その法的根拠を不明にして知らない。措置権に基づく指導監督責任は自明だが、人事に介入するということは、民間性の特質の継承発展という観点からも、天下りの元お役人に任せるとは民間社会事業の自殺行為に等しいことだろう。民間社会事業に関わる人々に多少はあると思われる、「地方自治体の下請け根性」もそれを可能にしている要因でもあろう。

何とか、民間児童養護施設設立の理念をもう一度確認し、子育てという困難ではあるが、充分な手応えと社会的に重大な意義のあるはたらきを、質量共に回復させなければならないときである。

とりわけ、本県におけるこの数年の不祥事続きによって、施設長などの最終責任者たちが、子どもたちの暮しに関わることをためらっている。これは本末転倒甚だしいことである。

かなり不適切な養育環境から逃れてきた子どもたちが、どのような思いで暮らしているのかを、ともにいる時間を可能な限り増やして共感することが必須である。そして、生まれてきたことを肯定し、出会いを共に喜ぶような関係や場面の構築こそが児童養護施設の仕事そのものである。そうすることで、子どもと暮しをつくっている職員たちの悩みや願いが理解され共感することができるのだから。

朝施設長室に入り、夜施設長室から帰るエライ人に、また時折訪ねて来る優しいオジサンオバサンとした存在にならないように心してもらいたい。

子どもたちの立ち居振る舞いなどの表現に秘められている悲しみや寂しさを感じ取り、職員の子どもへの関わり、あり方を共に苦しみながら求め続け、更に理念を高めていくものであるべきなのだ。そのための施設の管理運営なのであり、それ以外に流れないよう留意していかねばならないだろう。

一方、行政に当たる人々も、出世や昇進はお役人の願いや目標であることは言を待たないが、児童のための児童

福祉こそ目指して欲しいと心から願うものである。

一九九八年一月静岡の児童養護施設で子どもたちの集団暴行事件が発生し、外傷性脳梗塞などを負わせた事件があった。被害児の父は、県知事および当該の施設長、指導員が安全義務を怠ったとして訴えた。名古屋地裁は県に約三千万円の支払いを命じただけで、施設への責任と請求は棄却した判決があった。

ソーシャルワークの基本からも、関わった子どもが家にいようが一時保護所や施設に入ろうが、その子どもが負っている問題を解決し、成長と発達を保証する責任がワーカーや行政にはあるのである。いわばあってはいけない不祥事が発生した場合の責任はひとり施設だけにあるのではなく、少なくとも行政と共同責任としてあることをよく弁えるべきなのである。

責任逃れやなすり合いをするのではなく、現在の児童養護施設を取り巻く劣悪な条件の下で、よりよい子育ての一つの形を生成するためにこそ、官民そして現場を担う全職員は全力を尽くすべきだろう。共同責任関係にある児童相談所職員が施設の調査をして適否を判断し、あまつさえ、県職の天下り先にしていくことなど厳に慎むべきではないだろう。

学者もどきのつづやき ⑦

大芋煮会

山形大学 仙道 富士郎
学長

東京に在住している小生の友達である東京女子大のK教授と彼の友達の大新聞の元文化部長Nさんが馬見ヶ崎川の河原で芋煮会をやってくれるようになって数年経つ。どうしてこうなったか、いまだにその経過は定かでないのだが、おそらく酒を飲んで約束してしまったのではないかと思う。

昨年は折悪しく雨になってしまい、仙道亭でのお座敷芋煮会になつてしまった。

秋刀魚なども焼いて食べる予定になつていたので、魚を焼く煙が家中に充満したりして、結構大変ではあった。そんな雰囲気を感じたNさんが、「あまり迷惑をかけるから来年からは遠慮したい」といった発言をなさった。「それなら」と山形

の友人の一人が馬見ヶ崎河原で大鍋からパワーシヤベルで芋をすくう例の山形大芋煮会への参加を提案した。

今年の大芋煮会は九月三日であったが、東京の二夫婦は結果的には海外出張などで参加できないことになってしまったが、山形の友人5夫婦を含む総勢十二名が大芋煮会に参加した。三万人分の芋煮を用意したとのことであつたから、それくらいの人数は河原に居たのだらう。お祭り大好き人間の私はもうルンルンの気分である。

大芋煮会への参加を提案した友人があらかじめ券を商工会議所に予約してくれていて、大鍋の対岸にしつらえられたテントでの芋煮会への参加となつた。もうすでに芋煮を食べ終わった人も居たらしく、空いたプラスチックの井が一杯所に集められていた。井は山形県で開発されたもので、内側に薄いフィルムが張っており、使い終わるとフィルムをはぎ取るだけで洗わずにリサイクルに回すことができる優れたものである。最近、山形では飲食を伴う大型のフェスティバルなどでよく見かけるようになったものである。この井のことを知っている人がたまにフィルム

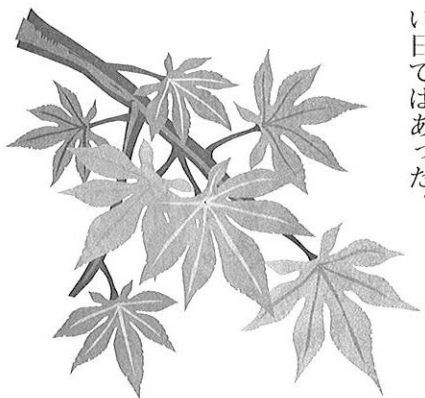
を剥がして置いていくつてくれるが、ほとんどの人は汚れた井をそのまま置いていく。一人のボランティアの若者がせつせとフィルム剥がしに精を出していた。

三十分くらい経つたのだろうか、ふと彼の方に眼をやると、彼はまだ黙々とその単純作業を続けているではないか。それ以来すっかり私はその若者のことが気になつてしまい、何回となく彼の方に眼をやるのだが、いつこうに彼はその作業を止めようとしな。芋煮を食べ終わる制限時間の午後三時になつて、我々が退散するときもまだ彼は作業を続けていた。もつともそのころには大量の井が集まつてきており、助っ人が二人加勢に駆けつけてきていた。いずれにしても、あの井の数から推し量ると、おそらく彼はトータル三時間位は、休まずに井と格闘したのではないか。もちろん私たちのグループはフィルムを剥がして置いてきたのだが。

こんな若者がいる以上、日本の国の将来も大丈夫ではないかと感傷的に思った。彼だけではなく、はつぴをきたボランティアがものすごくいっぱい居て、ときばきと働いている。券を受け取つて芋煮

の井を運んでくる人、おかわりの芋煮を間違ひなく注文した人のところに持つてくる係、一グループが退散した後、いち早くテーブルを拭きにくる年輩のご婦人連等々、じつに統制のとれた働きぶりである。おそらく商工会議所の人々によつて構成される指令本部があり、その指令に基づいて動いていたのだらう。はつぴを着た多くの知人がボランティアとして嬉々として働いているのに出会い嬉しくなつた。

我が国にもボランティアの文化が段々根付いてきたということだろう。それに加えて山形の人たちは大変真面目だから、ボランティアの要請に快く応じるひとが多いと言ふことでもあるように思う。芋煮もうまかつたが、とても嬉しい日ではあつた。



タヌキそば

彫刻家 中島 陸雄

先日、車を走らせていたら、一軒のそば屋が目についた。伝統的な和風建築の店で、いかにもそばの味も良いのではないかと思わせる雰囲気を感じる。その店に入ってみた。家内はざるそば、私はタヌキそばを注文した。本当のそばの味は、もりやざるそばの類でこそ味わえるという説があるが、私はそれ程の味の追求はしない。食べられれば何でもかまわないくちである。いわゆるそば通ではないから。間もなくタヌキそばが出てきた。ありがたいうちに、小さな木製のオタマが付いていて、つゆを吸う事ができる。誰も見えない所ならいざ知らず、どんぶりをかかえてガブガブおつゆを吸うわけにはいかない。ま、それはそれとして、私はタヌキそばを食べるたびに思い出す事がある。何十年前の事になるが、友達達のS君が「むっさん、タヌキそばとキツネそばの違いは何だと思っ？」と、いたずらっぽく質問してきた。「そりゃあれだよ、キツネには油揚げ、タヌキには揚げ玉が入っている。これだけの違

いだんべ。」と答えた。彼は「それはそうなんだけどね、キツネそばの場合、油揚げを食べてしまえば、つゆを残したって食べ切れるが、タヌキの場合は、頑張つてつゆを全部飲まなければ揚げ玉は食べきれないで、つゆの中に少し残っちゃうんだよ。それが残念でなあ。ここが違うんだよ。」と言った。なるほどそう言われてみると、私はやや表面的な見方であったが、S君の思考は一步踏み込んでいる。しかし、たかがそばである。普通は無意識的に腹の中に流し込んでいるだけなのだが、S君の場合、そんな哲学的思考を伴って、大した哲学ではないが、食べているようであった。彼は、マジメくさった顔をして、頭の中ではいつもどこかでふざけているのである。そんな事を思い出しながら、私はタヌキそばを食べ、小さな木製のオタマを使って、一個の揚げ玉も残すまいと、ひたすら努力した事は言うまでもない。一ヶ月程前、S君の個展を見に行つた。才能に恵まれた彼の絵は、実に素晴らしい。彼は、優れた技術をも

っているのだが、決してそれを表には出さない。表現の裏でしつかりと技術が支えている。技術が技術として表に出ると、うまいなあと思うけれども、感動はしないものだ。作品を見終わって椅子に腰をおろすと「おれねえ、最近ね、体の調子が良くないんだよ。むっさんほどこも悪い所はないんかよ。」と彼は言う。「おれは今のところ、検査をしてないから、悪い所はあるかも知れないけど、見つかっていないだけなんだ。ただ、首から上のあたりが先天的に良くないけど、良い薬がないらしいんだよ。」と言っておく。次々とお客が入ってくるので、余り話もできずに会場を出てきたが、彼の体調が良くないとは、困ったものである。心配だ。いつか近いうちに、ゆっくりS君と会いたいと思う。そばでも食べながら、そして彼は忘れていたであろうから「キツネとタヌキそばの違いは何だ？」とからかってやりたい。

「この猫はフェルマータで鳴くね」と家内が言った。「フェルマータって何だい？」と聞くと「音楽でほら、延長記号といって或る部分を長くのばして歌うでしょう。あれよ。」と言う。なるほどこの猫は「ニャーン」と長く延ばして鳴く。腹がへるとフェルマータで鳴くのだった。フェルマータと言えば、私は童謡や唱歌を楽しく歌う会に入っている。指導のK先生が荒城の月を指導して下さった時「ここはフェルマータですから、長く延ばしますよ」と言われ、両手を高く上げ、みんながそれに合わせて「あ、荒城の」と長く延ばして歌った。その事によって、一層感情が深まったようである。まさか、うちの黒猫が、あのまん丸い目玉のようなフェルマータの記号を知っているわけではあるまいが。



続・トムソーヤ達の朝 その6

日本キリスト教団東大宮教会 永野 三恵

秋の高く澄み渡った青空や、さんさんと注ぐ陽の光は、人の気持ちを和ませ明るくしてくれれます。「秋はやっぱり良いな。」と幸せな気分になります。こうした「翳り」のない自然の美しさに比べ、人間の心の中にはいつもどこかに「翳り」があるように思います。新聞やテレビで報じられる毎日のニュースは「また...」と心が暗くなります。同じような過ちが繰り返され、さらにエスカレートした事件が起きる。今、人間の内面の暗闇を憂えずにはいられません。この頃しきりに、

と願い、毎週唱えていたのです。何かの折、この祈りの一説が心に蘇ってくればと願っていたのでした。しかし、私は何よりも自分しか愛することできない。「この私」への自戒の祈りとして必要でした。信仰を告白し礼拝を守り、み言葉によって「神を愛し、隣人を愛する」生活へと変えられたいと願いながらも、自分の心の中には自分しか愛せない「私」がいつも居るのです。そんな私にとってこの祈りは私の生活の支えになっていました。「平和を求める祈り」主よ、私をあなたの平和の道具として下さい。憎しみのあるところに愛をもたらす人に、争いのあるところに許しを、疑いのあるところに信仰を、絶望のあるところに希望を、闇のあるところに光を、哀しみのあるところに喜びをもたらす人にして下さい。主よ、慰められるよりも慰めることを、理解されることよりも理解することとを、愛されるよりも愛することを、求めることができますように。私たちは、人に与えることによつて多くを受け、

許す時に許されるのですから。何と素晴らしい祈りでしょう。何度も声に出して唱えても、どの一節も大切に省くことができせん。フランススコは、今は世界文化遺産に登録されているイタリア中部の小さな町、アッシジに十三世紀に生まれました。恵まれた青年期を過ごし、騎士に憧れ、挫折を繰り返す中で、神の呼びかけを耳にし、祈りと贖罪の生活に入ったそうです。「アッシジの聖フランシスコの小さな花」(石井健吾訳・聖母文庫)によれば、フランシスコの生きる目標は、この世の主人に仕える騎士ではなく、キリストを唯一の主君と仰ぎ、それに絶対の忠誠を尽くすキリストの騎士であり、戦う相手は敵や人間ではなく、自己のうちに住むエゴと罪にいなう悪の力であった、と記されています。また、生涯を神への信仰と貧しい人々への愛の実践に捧げたマザー・テレサも、このフランシスコの「平和を求める祈り」を神の愛の宣教師たち(マザー・テレサ創立の修道会)と共に、毎日唱えていると記されています。(マザー・テレサ 愛と祈りのことば 渡辺和子 PHP文庫)

フランシスコの生涯を信仰的に神学的に探求するには、奥が深く私のような門外漢には難しいのですが、私は単純に争いの絶えないこの社会に、この世界に今こそ、この「平和を求める祈り」が大切だと痛切に思います。折しも、北朝鮮が核実験を行ったというニュースは世界を揺るがしています。憎しみの連鎖が世界に渦巻いています。その連鎖を断ち切る政治的な手段を世界のトップ達は協議しています。しかし、わたしはやはり、ひとりひとりの心の中に「平和を求める祈り」の鎖を強く長くし、内面が変えられなくては...と思います。家族・友人・隣人との毎日の生活の中で、小さな静かなこの祈りの精神を行う人でありたいと思います。



プ・ロ・ズ・ム

河のほとり 倉澤家

芸術の秋、スポーツの秋、そして食欲の秋です。皆さん、ごはんをおいしく食べていますか。

グループホームの食事は、毎日担当者が頭を悩ませながら考えています。一般家庭の主婦のように、スーパーで安い食材を見つけてから献立を立ててみたり、子どもたちのリクエストにに応じたり、忙しい日にはちよつと手を抜いてみたりしながら、安くて！おいしい！心のこもった食事が用意できるよう心がけています。今回は、そんな倉澤家の人気メニューをご紹介します。

最近の人気ナンバーワンは「手作りシユーマイ」。特に普通のシユーマイと変わった所はありませんが、強いて言えばザーサイを加える所が我が家流でしょうか。そして不動の人気は「ひき肉カレー」。我が家のひき肉カレーの特徴は、人参やじゃがいもは入れずに、合びき肉と玉ねぎのみじん切り、それにニンニク、しょうがのみのシンプルさでしょうか。出来上がったひき肉カレーをごはん

にかけ、上にゆで卵のスライス、あればパセリをパリリで完成です。お弁当のおかずナンバーワンは「明太子入り卵焼き」です。厚焼き卵の真ん中に明太子を入れるだけです。大好評でした。ただ生ものを使うので、暑い時期のお弁当には向きません。お弁当はレンジでチン；も利用しますが、手作りおかずは必ず入れようと心がけています。

子どもたちの「おいしかった！」「また作ってネー」ということばが、私のエネルギー源となります。今日は何を作ろう！またおいしいと言わせよう！新しいメニューに挑戦しよう！という気持ちを持たせてくれます。

子どもたちがお弁当を楽しみに登校し、夕食を心待ちにできるような食生活を作り続けたいと願っています。

倉澤 智子



あかり窓 心理室から

芸術の秋とも呼ばれる良い季節になりました。皆様がいかがお過ごしでしょうか。

グループホームで生活している要くんはピアノに非常に興味を持っていました。けれども、練習環境がまだ整っていないということで、多少ピアノをたしなんでいた私が先生代理を引き受けることになったのです。普段顔を合わせる甘い坊の要くんでしたが、ピアノ教室の生徒としてやってきた要くんは引き締まった表情をしながら、緊張した面持ちでいました。同じ人間であっても違う立場として出会うだけで、こんなにも見せる表情が違うのかと驚くと同時に、場の違いを感じ取って、それに即した態度を取れるようになったのだなあと成長を感じた一瞬でもありました。

積 みどり



子どもたちの季節 仙道家

秋も深まり、日陰より日なたを選んで時間を過ごすことが多くなりました。子どもたちは毎日元気に、暗くなるまで遊んでいます。皆様がいかがお過ごしでしょうか。

秋と言えば運動会。今年も幼小中とそれぞれ元気一杯に練習の成果を見せてくれました。一番多い小学校の運動会には大人も他の子どもも総出で応援に行きました。

少し前まで歩き方さえもこちなかつた浪子が腕を振ってテンポよく走る姿。緊張することがないのかと思っていた理奈が少し照れくさそうに踊っている姿。小さい頃から運動神経のよかつた貴子は徒競走でダントツの一位。いつもふざけてばかりいる京助の真剣な眼差し。徒競走で一度も一位を取ったことのない清貴が最後の運動会で一位を取り、思わず両手を挙げてゴールした勇姿：などなど数え上げたらきりがありません。どの子どもたちの真剣な姿や成長に感動させられた一日でした。

小西 剛史

原田家日記

季節はすっかり秋になり、先日こちらの小学校・中学校でも運動会が行われました。いつも外で元気がよく遊んでいる活発な子ども達です。運動会では活躍する場面が多く職員も皆総出で応援に出かけました。その際の四年生の女の子が鼓笛を行うという事で可愛い衣装姿を写真におさめようと声をかけたのですが、返事をせず知らん振り、帰宅後「皆の前で大声で名前呼ばれて超恥ずかしかったし！」と言われてしまいました。去年、授業参観で授業中にも関わらず廊下まで走って来てくれたことなどを思い返し、この一年間の成長をしみじみと感じるところでありました。今後も子ども達の成長と活躍を見逃さぬよう寄り添い共に歩んでいく家族であり続けたいと思います。

遠藤 めぐみ



季節のおとずれ

竹花家

竹花家の目の前には広大な利根川の土手が広がっています。関東平野のほぼ中心にあるこの地では空気が澄んでくる秋口からは土手に登ると、東から筑波山、日光連山、赤城、浅間山と遠く西には南アルプス、富士山と四方の山並みを観ることが出来ます。特に今の時期から冬にかけての夕暮れは絶景であり、時間があれば双子の兄妹を連れて土手に登り利根の黄昏を楽しみながら散歩をしております。分単位で変わる空の色、太陽、筑波山の隣に並ぶようにして現れる月を眺めながら子ども達と話しながら歩く一時は情操教育にもなりますが、なによりも自分自身の癒しにもなっています。

穴水 祐介

佐藤家

暑い夏が終わり、肌寒くなってきた秋：と思っているとあつという間に冬になります。季節の移り変わりも早い物ですが、子どもたちの成長も見逃してしまいうるようになります。特にわが家に五月にやってくる来た二歳の杉は、様々な面で周

りの刺激を受け成長しています。

先日母、祖母との外出を終えた杉は、別れ際に急に表情を堅くして、母が車に乗ろうとしたときには泣き出してしまったのです。この前の面会の時には全く抵抗なくバイバイをしたのに。彼の中にどのような感情があつたのかはわかりませんが、母（自分にとつてどういう存在かは分かっていないと思いますが）が行つてしまうことが「嫌だ」と感じてくれたことに私は成長を感じました。

光の子どもの家には様々な方が来訪して下さいます。それはとても感謝すべきことではありませんが、一般家庭よりも出会いと別れの場が多く、出会うこと、別れることに鈍感になりやすいのでは：とも思っています。私はここにいます子ども達に、出会えたことを良かったと思える瞬間と、別れるときの悲しさを素直に悲しいと感じられる感性を持ち続けて欲しいと思います。

サーピス！もう一文。

佐藤家には、五月から二歳の男の子アキラが仲間に加りました。この子は見ているだけで十分楽しいです。好奇心旺盛なので放つて置いても一人で楽しみを見つけ、次々に手を出したり、踊っていたり、うたつ

ていたりします。ですが見ていて楽しいのはアキラだけではありません。アキラはコンビカーを持っていても乗っていません。でもお気に入りなわけではなく、乗っていません。では乗っていないときは誰が乗っているのでしょうか？

ある時、私がダイニングから玄関前の廊下を見ると何故か小三の理奈がコンビカーに乗り無表情にガラガラ走りまわっていたのです。これはその後何度となく目にする事となつた光景でした。今でも理奈はプレゼントにコンビカーを本気でねだっているそうです。

実はアキラのコンビカーを愛用しているのは理奈だけではないのです。アキラと時折遊んでくれている中学一年生の悠。私がアキラを抱っこしている時、足下にあつたコンビカーに颯爽と乗っていつてしまいました。この光景も何度となく目にしています。そしてまだ、コンビカーを狙っている人物はいるのです。ドリフト！などと言って乗り回している大人が。アキラが泣いて訴えても返さうとはしないのです。楽しいのだからしょうがない。ごめんねアキラ：見られても全く平気なの。

アキラが来て笑いがいくつも増えた佐藤家です。

田口 貴子

家族に関わる その14

菅原 哲男

暁子は中学生で入所してきた。中学生などの高齢での入所については、その子どもが持っている人的物的等の環境のプラスマイナスとその資源をどのように利用しながら自立へ向けた関わりをしていくのかがアセスメントに関わる大きな課題であろう。暁子に関わった児童相談所職員、特に担当福祉司及びその上司は誠実に関わってもらえた数少ないはたき手だった。それでも、高齢での入所は困難の上に困難を極める。その子の入所以前の長い生活がどんなに詳細に分析され道のりが洞察されたとしても、乳幼児から関わってきた子どものようなわけにはいかないのである。だからダメだというのではない。相当な力を集めて関わりを強化し続けなければならないことを組織全体が認識し覚悟して受け入れなければならないのである。

暁子は体育的にも知的にも通常よりは低く、いわゆるポーターラインの子どもであった。しかし、何とか高校を卒業して電子部品製造の工場に就職して頑張っていた。かなり丁寧なアフターケアを終えて彼女はいわゆる社会的自立を果たしていった。そんなある深夜、彼女の会社から暁子

が工場の男子同僚複数名に暴行されたことが連絡されてきた。同僚の中に彼女に好意を持っている者がいて、それを彼女に伝えたが彼女は応じなかったという。彼女が二人の男子同僚に相談をして残業帰りの彼女を待ち伏せした。二人が彼女の自由を奪い、件の男が暴行に及んだという。とうてい許し難い事件であった。彼女は会社の上司に連絡し、上司から私に事実と犯行に及んだ者たちを懲戒解雇などの処分をし、そして陳謝をしてきたのである。会社としては誠実な対応に終始したことを今でも鮮明に覚えている。

しかし、その後彼女はその件によって妊った。産むか産まないか苦悩の月日を要して彼女は産んだ。産んだ子どもが月を経ずして暴行に及んだ男に似てきた。彼女は、自分が産んだ子どもを可愛いと思うときと、暴行に及んだ実父（認知していない）と似ている風貌などについて身震いするほど嫌悪するという苛烈な状況の中で、乳児院への措置を願ったのであった。児童相談所に願ひ出たから児童相談所と暁子から同時に連絡があったものであり、数十年前のこととて私たちにはなす

すべもなかったのであった。

そして乳児院在留期間の終了と同時に、暁子からの強い要望によって私たちのもとに入所してきたのである。乳児院に暁子は必要最低限の訪問はしていたようである。その子は野生児のような荒々しさと多動ぶりの男の子だった。

担当保育士の包容力と忍耐、おちろかさなどが相まって半年を経ずして可愛らしい幼児になってきた。遠距離を隠せず毎月数回の面会に来る暁子は次第に愛着を表現し続けるその子に母性的な表現を示すようになってきたのである。ただ、この子も体育的知育的な遅滞が成長するに及んではつきりして来ててもいた。

暁子は、自分の子どもをいつまでも私たちのところに任せおくことが次第に負担になってきたようだった。ある日、暁子が、私以外の者を立ち会わせないで、「この子を引き取って自分で育てようかどうか迷っている。どうしたらいいだろう」と相談してきた。幼稚園の二年間も終わりに近づきもうすぐ小学校入学を迎えようとしていたころであった。

だんだん可愛いと心から思うようになってきた自分の子どもへの愛着や自分もそこで育てられたという若干の負い目や責任意識などによるものであったと思わ

れた。引き取るとしてどうするのか。それが第一番の問題であること。小規模な企業の生産ラインによりやくぶら下がっているような暁子の能力などから、何よりも経済的な蓄えもなくはたらき続けなければ生活保護受給以外考えられなかったのである。

また、私たちが相当辛抱しながら育てたことで暁子が今社会的に何とか自立をしている状態で、養育能力などにも相当な課題が残っていった。私たちは職員会議を繰り返し、暁子の人生とその子どものそれを考え悩み話し続けた。

そしてある日、やってきた暁子に、「この子どもが暴行した男にまだ似ているか。そんな時どう思うか？」と問いかけた。暁子は、「似ている。仕事や眼使いなどがそっくりだ。それに気づいたとき無性に腹が立ち嫌になる。」

そんなことでその子は私たちと暁子が関わるべきことを整理しながら力を合わせて育てることにした。それ以後そこを私は去った。かなり手強い子どもで相当な試しを受けた十数年間だったことや暁子と同じ高校を卒業して社会人となったことを、その子が十年ほど前に自らの命を絶つた葬儀に参列した時に知らされた。

現場から

続・光の子らしく

24

岩崎 まり子

台風一過で、今日は何とも言えないくらいお月様がきれいな晩です。皆様、いかがお過ごしですか。あれは、いつものように小学生の宿題を見ながら、そろそろ夕飯の支度をしようかと思っ矢先の電話でした。

「おまり……。」
涙声の加津子が、
「子宮ガン検診、ひっかかった……。」

「え……何でまた……何と……。」
驚きの余り、よくわからない返事しかしない私に、加津子はたたまかけるように、
「何であの人は子どもを産めて、私は産めなくなっちゃうの？あの

人は、育てる気もないのに、欲しくもないのに、あの人はぼこぼこ産めて、何で私は産めなくなっちゃうの!？」

「あの人」というのは、勿論彼女の実母のこと、現在行方不明です。子宮ガンかもしれないという激しい動揺が、それだけでなく、こんな激しい怒りとなってしまふことに、そしてその怒りのあて所もないというところに痛いほどの哀しみを感じ、
「そうだよね……、本当にそうだよね……。」
と言うことしか出来ませんでした。どこに底に流れているものを強く

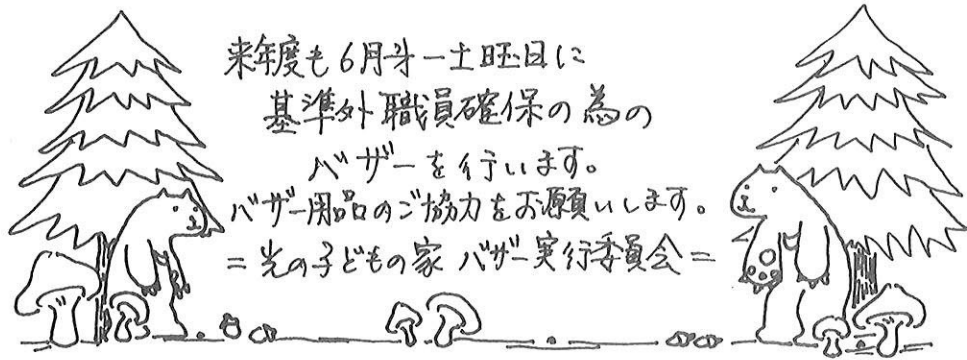
意識せずには居られないというのは、多かれ少なかれ誰でもあることでしょう。けれど、「普通」でない背景を負わされて生まれ、生きていかなければならない者たちにとつては、それはまた別の重さがあります。

一度は「生まれてきて良かった」と思えたとしても、それは絶対でも永遠でもなく、「何で生まれてきたんだろう」「何で産んだんだろう」「何で!？」という思いは、その後何度も彼女たちに襲いかかるのではないのでしょうか。本当に真実告知は一回では終わらないと実感します。その後の「看護」に何年も何年もかかるのです。

電話の最後に、
「でも、いろいろあったけど私は加津子が生まれてくれて良かったと思ってるよ。」



私の大切な子どもたちが、心もからだも元気でいてくれるよう、声の届かないところへも届く、月の光に祈るばかりです。



日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

2006年4月1日▶6月末日

2006年 7月

幼児6名 小学生15名 中学生8名 高校生8名 措置外5名 計43名

- 1日 聖学院大学生が子どもたちと交わりの時を楽しく、元気に
- 2日 カリフォルニア大ディヴィス校より70日間の研修に2名来訪
- 5日 手打ちそば会、朝霞市の柴田様、新座市の森様他
- 10日 夏休み個別計画について職員会議で協議
- 19日 夏休みオープニングパーティー バーベキューを楽しみ明日から始まる40日余りの夏休みを冒険と美しい思い出づくりの決意を確かめ合う
- 20日 家庭訪問 さいたま市方面 東小との懇談会
- 24日~小学生低学年G、八ヶ岳登山へ 今年も谷本画伯の力作に囲まれたギャラリーでの貴重な3泊4日
- 27日 散髪奉仕 田村様
- 28日~小学生高学年G、八ヶ岳登山へ今年も最困難コースで赤岳登頂
- <7月の物品ご寄贈者> 小松原美砂子 斉藤厚子 西村初枝 島崎渚 松本明子 日原直代 町井紀子 他多数の各位様
- 8月
- 5日 蔓屋様よりうなぎ お盆帰省や、帰省できない子どもたちの為の家行事開始
- 6日~佐藤家 秋田へ小西実家別荘
- 9日~竹花家と他の家の子どもたちが増田設計士別荘をお

借りして宇佐見の海へ

- 11日~仙道家 20年に及ぶ湯河原府川様宅を利用させていただく
- 21日 聖学院ワークキャンプ 草取りなど構内整備と子どもたちとの楽しい2日間
- 28日 福島力様来訪 子どもたち、職員のポートレートを撮って下さる
- 30日 夏休みさよならパーティー
- <8月の物品ご寄贈者> あずさわ商店 栗原恵美子 滝沢洋子 岡本 岩崎 斉藤布団 店 松本明子 他多数の各位様
- 9月
- 1日 埼玉福祉専門学校より2名見学に
- 3日 諸川伝道所より9名見学に
- 5日 「かずきの日」記念礼拝、お茶会、夕食会 同級生24名、横塚先生、卒園生等が来訪しめやかにそしてクラス会のような和やかさも 自立支援計画見直し開始
- 8日 カリフォルニア大研修生2名の送別会
- 13日 中学校との懇談会
- 16日 小学校運動会
- 27日 散髪奉仕 田村様
- <9月の物品ご寄贈> 斉藤 神尾佐世子 西貝 松本茂子 落合美佐子 川田久 田部井 本田美奈子さん母上 他多数の各位様
- こんな夏休みを迎え過ぎました。 感謝。(くら)

/// ———— 反 射 光 ———— ///

☆春の早い頃に策定した個別自立支援計画を大きく育つ子どもたちの夏休みを過ぎた状況を確認して修正する見直しをしながら収穫の秋を迎えております☆次年度の課題もうつつらと見えてきます☆あれもこれもと欲張りながら、何よりも命が守られることを願います☆さわやかな秋の日々にも様々な対立の構図、社会の縮図の痛ましい報道が絶えませんが☆安心して暮らすことさえ努力なしには不可能なことを感じます☆みどりの地球が壊れそうな大量殺戮兵器の増大が不安を地球規模に拡大し続けます☆改めて今自分に出来ることは何かを問いたです日々でもあります☆また一人幼い仲間を迎えました☆愛されるよりは拒絶され暴力的な中で生きてきたこの子たちが、心から生まれてきてよかったと思える時間をのびのびと重ねていくことを保障するために私たちがここにいる☆その初心を忘れずにはたらし続けるその困難から逃げずに祈りつつ励みます☆変わらないご支援をお願いいたします。(のぶ)